

## 女性研究者 - 21 世紀の展望 -

Women in Sciences - Prospect in the 21st century &#8211;

# 坂東 昌子[1]

# Masako Bando[1]

[1] 愛知大学・一般教育

[1] Aichi University

私が、専門(素粒子論)を超えた分野に興味を持ち、性差の問題や生命倫理と科学の行方など、幅広い範囲で共同研究を始めようとしたのは、21 世紀の科学と科学社会のあり方について新しい方法論を持ち込むべきことを痛感するようになったからである。少なくとも、私がこういうことを考えるようになったのは、共通の問題を抱える仲間との交流助け合いを通じて、苦労を分かち合えたこと、たくさんの人と交流できたこと、専門分野で交流する海外女性研究者とも生活観を共有できたこと、分野を異にする女性研究者の仲間をたくさんいること、などなど、女性研究者に特徴的なライフスタイル・ライフヒストリーを経験したからでないだろうか。これが、異分野間の交流のネットワーク、国際交流の輪となり、複合領域の課題を追求する最適の環境を私に与えた。

私の子育ての時期は、我が家を共同保育の場として提供し共同保育を運営しながら、京都大学に保育所を作る仲間が沢山いた。おかげで、京都大学には、今構内に、共同保育所の名前を引きついで「朱い実保育園」とその後できた「風の子保育園」がある。当時は、保育理論の専門家とも協力し、専門の異なる異分野交流の機会も結構あった。そのためもあって、専門の素粒子論の研究では、まだ達成感がない。男性なら「もうしっかりやったから満足だ」というような気分にもなれず、いまだにやり残した思いが強いので、研究の現場から身を引けない。このことは、女性のライフサイクルの特徴でもある。そしてこのライフサイクルの多様性が実は21 世紀の科学のあり方と大いに関係しているのでは・・・と最近思うようになった。ここでまた新たに異なる分野の方々とお会いして、議論の機会を頂いたことで、この思いをもう少し論理的に客観的に発展させていきたいと願っている。

当日予定している内容

1. わが国の女性研究者の地位をめぐる歴史
2. 自然系学会の構造 - アンケートから見る学会の構造
3. 女性と科学と生活 - アンケートからみる女性研究者
4. 今、何が必要か - 世界の状況との比較
5. 21 世紀の科学と女性研究者